



^ 13  
2901  
14





門 へ 13  
2901  
巻 14

孝治郎

田之助

田之助

昭和九年  
七月五日  
購末

色梅羨婦衿卷之十四

江戸 爲永春水著

第七七回

七字の利益ありとある折の内の妙法寺の田舎の  
茶漬群集する祖師の老いぞきとけは遠くあざむきと  
家名せしの當地ふ名高き料屋店の門不復の二の建  
ハトキ三梅舟さんの折の内の障子ハ小川の此處の後  
まりの建場の鳥居の一口息をつけの後ハ内の後



公とまゐるとも何れとも何れも此多分大淺とぞあり  
拾公と言ふバ豊倉の門へおる妓女が出アテセ「コレサ  
か茶ハ直おそ方へおを越せとるうね人アを御人後院へ  
早く南里さんの鏡の通りまて一盃とらん行が極く  
妙サ子「丈夫やア角も角も吞ぢのうぬの心分別とほろが  
直ひト言ひまゝ皆々あつまきの契彦へ通り極く  
能の両者も出て三個ハ欣けりぞく「へい迎下や竹の  
子と藤の匂がまぎるとのつぷと玉子とらが産原とおと

又料理ごころ悉角 山家の体ハ外まね人沢サ子  
「ハイヤ然うとる麻糸をこののでもね人ノサ生有も喰ハ  
せろと言やアありやまきけまども 遠所へ来ちやアあるう  
ぶえん 玉子の方ガ洒落て居やまノサトキ春好さん先  
刺ちよらひり序びりまきのあらう豊倉の妓女とよ人の  
何ぞまお然て一奇談ありら子「あつものういのことせねる  
ちよらくる訳もやありやせん寔お奇と妙くとの入同窓の  
あつ妓女サ「へいごらあらんまう始の言まが大人うごころ







尺がころろむらむら此の族校ハお気の毒なから地へ  
お損とるまらんで下さいまーご。ゴウとんるふ下卑むら  
マア開るせ余程孫説ごら。アまどやアま女ハ小  
國の山の中て生まるところが西風とりんら丸別あり  
ども往んて名を揚と訳ら子。ア席ふ四國をまらんで  
穢とるまらぶ宜らうこのふ。アイヤモウとまらくゆ一の解ら  
むら合ごど小國と大廓のまら西風と大當時新  
宿のまらと言ひかを情その女が小國の者心アソラまら

分解むら小國の者大為羽織ある紗と大遠ひかまら  
べゆねも然ういらく謙釈が入る中らまらゆいがるら  
むら者といふのハ愛者のまらアま。アまら程愛者が者  
子まらどや幣回ハ結ごらう。アまら其知ごその侶が  
竹板あやし。アまら侶どやむらヨ。アホイる遠らる者の  
まらサ。アまらの者が情男をこらえん。アまら然とゆい  
開けてまらまらごせ其知ご何板あやし。アまら先その男の  
まらまら。アまら説くべららむサ。アまら程まら。アまら知ご彼











へ見とく時でも見なまらぐ宜い  
男ハお前のあつたる人  
より兄中より実う世と迫の親類  
親兄中より任の親類  
各ハ何と言ひか  
期く言ハ身板が  
氣ハねり  
落ふるざらうと思つて眉毛を  
「見とく時でも見なまらぐ宜い」  
「男ハお前のあつたる人」  
「より兄中より実う世と迫の親類」  
「親兄中より任の親類」  
「各ハ何と言ひか」  
「期く言ハ身板が」  
「氣ハねり」  
「落ふるざらうと思つて眉毛を」

どもお前を  
春好さんの持と  
言ふもろぐ  
来ん  
達心は切つたの  
ちり  
嬢さるとも  
見ても素人と  
「どもお前を」  
「春好さんの持と」  
「言ふもろぐ」  
「来ん」  
「達心は切つたの」  
「ちり」  
「嬢さるとも」  
「見ても素人と」



孔も見たりがゆね又はつらう  
 りも又逢もは連中を見たりし  
 下も山家育ち那處女の氣ふ入  
 見たりすは中心けんのんまのハ  
 體如ハ先刻ツラ二個の處女が  
 何ぞ嬉しきふ完ふと笑りて居  
 お茶の類を見たり後入等ご  
 顔色を如人のりこの落着と鼻

ぬり付七居るうま交心好男子  
 がおるるるね人  
 「コウお茶連も憑も〜くね  
 ちやせく異が官のりサト言  
 げる  
 りせ言ひ合ひるがは一程  
 ちも向ふの産後めくハ房  
 ま〜コウは上私事やアス











お存ぞんご子こえんえんの婆おばアアの同どう道どうふふららととちちややアア團だんららと  
思おもらら七しち室むろ耳みみををナナララセセのの久ひさ嶋じま々々一いちのの子こエエ房ふやトトヤヤ  
ままアアののおお言いひひままるるヨヨ正ただ直ただのののの空くらももああららいいとと  
ああららままたたののせせ「おおアア并ならびび然しからら真まふふううけけららまま  
ちちややおお氣きのの毒どくぞぞヨヨ真ま実まのの子こ先ま刺さ見みううけけのの時ときハ  
ああららまま一い心こころふふららのの伴あんん心こころおお存ぞんごごううととななるるも  
ううけけああんんどどけけははもも沈しず度か小こ川がわのの這は知ちれれ休やすんん心こころおおまま  
ごごららううとと思おもひひららうう私わたしももおお百ひゃく度どををああげげららううああららうう

久ひさししのの人ひとをを頼たのんん心こころををつつけけてて甚しくららううとと丁てい  
どどろろ遠とほ家いえののおお存ぞんごごううとと毫まもも嬉うれししくくううととヨヨ房ふや  
嬉うれししのの然しからら心こころああららまま一いとと久ひさササアアはは方かたへへおおままん  
ををああららままトト言いひひままららおお中ちゆうのの産うままへへ通とほりりおお氣きにに対たいすす  
ううへへイイ貴き女にょ宜よくくおお氣きにに心こころごごららまま一いとと子こららうう這こ  
懐なつハハ峯ミネさんさんののノノウウ房ふやさんさん房ふやトトヤヤのの様さま一いととああららん  
おお存ぞんごごののままををエエトトナナ三さん物もの交まひひごごららおお見みううけけららまま一いとと  
極たぎごごうう房ふやトトヤヤ然しからら心こころごごららまま一いととエエ私わたしままららううととなり







ありまゝが子基を言やアねが悪いのごとく遠行お  
お立ちまゝのお糸さんあも涙の発理心ありまゝねを  
うらへばお嬢が涙切ふ力をつけくお呉るたりうら  
ま心今日も折の角さぬへお糸さんのひふいとい  
お糸りをとるうん心ありまゝが子お箴の表が大造  
算のうらほと六采しとくとおのひまはヨ ア合せん  
あかお糸さんの性りて居る折ハお知り心まゝのござ  
房ハイまが知ること居るうらひまゝを揺るおま

せんけきども一向ふまぐらまゝの心ありまゝ  
びね小綴りぞ歩行まゝのサ アヤまゝおまゝ  
お糸さんの方へお知らせと見へるまゝ房ハお知  
せまゝの心おまゝの心おまゝの心おまゝの心  
お身へ遠入りのごとくありまゝ久 アアお糸も委  
あゝおまゝの心おまゝの心おまゝの心おまゝの心  
お糸さんのまゝおまゝの心おまゝの心おまゝの心  
まゝおまゝの心おまゝの心おまゝの心おまゝの心









あつしは久と久 兼一は乃新川亭の老女さんが降巫を  
降ん心お受のときお六の心も怖ろしう人お取巻  
まきく遊るりも帰るともうらうらうと言ひまう一  
そんな新いもやうぶるません久 一は一具六怖い  
あふお逢ひぶとさうぶけまどもそんなあの時も帰る  
夏の出来まの奴さんあふ 房一や贈うし降巫を  
あんな嘘言を吐く母公あを探せくお後やお茶を  
取ら七世さんぶヨ 一はとりや高賣ぶくう詮方が

あつしは久と久 兼一は乃新川亭の老女さんが降巫を  
降ん心お受のときお六の心も怖ろしう人お取巻  
まきく遊るりも帰るともうらうらうと言ひまう一  
そんな新いもやうぶるません久 一は一具六怖い  
あふお逢ひぶとさうぶけまどもそんなあの時も帰る  
夏の出来まの奴さんあふ 房一や贈うし降巫を  
あんな嘘言を吐く母公あを探せくお後やお茶を  
取ら七世さんぶヨ 一はとりや高賣ぶくう詮方が



嬢を初めにお存ざらう子 房ハイ浪花屋の小  
さうらふ宅お寤う 悦情の中うふく居まう  
形嬢ハは春 年季が明へ 今トや 四谷とや  
お爺さんの處お居るトや ありません  
四谷のお爺さんの所お孫君さんも探ハは居る  
なると云ひ心 其人の名がうう 市良も探さんと  
言らうトや 房ハア 私も小孫さんの姓と云  
あふがそんな名心 ありまうト云うト云う 大を 俠丸

方おや ありません 房ハア 変ざう 孫さんと  
交へん お存ざう 心子 交へん 度のもも 相談お  
のトサ 宅お奇妙なものトや ありまう  
彼孫君が孫倉の尼寺へ 住人とて 雇ひ  
軒が悪漢あり 身を稼ささんと云う  
不思議 其場を 逢う のも 彼孫君の性  
華お遊子の 髪をも 散らして 市良も 方  
探らう 其の仔細 奥の物語り



す子然うん 訳ごそう づうあいときと 柳川亭の母  
公の方へ引渡しくお糸さんが尼ふるふとすまぐ  
思ひつゝこのがゆもるふの心只那様ひとり馬麻  
者ふさま万のもの可憐そうごうよく母公とも内この  
相残をしくお糸方の公の意をも聞さう急心細せ  
るけらいどや 後日ふあつどあつふく算くまいとふ  
市良き勝さんの涙い了勢ごときころが 那人ひとり  
母公もあつて 涙もあるくろま行心後さんの方へ  
くさう

母公もあつてのサまおまご 幫間の義蝶さんがお糸の  
うふ是れも 規模をおさせる中うふと義蝶さんの中へ  
入まて 那人くろ母公の方へ渡りて 笑み相談あつた  
このごうくまごお糸達の方へ 咄まるがるいので  
らうヨ 房へラベ 嬌しい変心ありまは子エ 私きやア 姉上  
さんの行方がお糸しくも 知まらぬときふ死んぬも言  
訳がらぬと思ひましよヨ 糸へ私も今の咄し心廣が



活もろこぢうみ心持が為まはる是とりふももんみぢの  
内さぬの四利益うと思ひますヨ 房「ホニ然う心ありまは  
ねまふつけいも今度のもいハ私うぢ配うことごと  
ありまはる多姉上さんの行儀が知事こと言つてのちく  
顔と合ハさるる義理トやアありませんうぢ母公の  
苦勞とけうけうお茶さんお氣を操せうりし言次  
あやア驚とあろし折の内さぬのお舟子あつる氣が  
ありまはるうぢお茶さんハ末永く姉上さんを見捨る心  
しんじゆん

しんじゆん

和合しんお呉んみなとヨ 兼「アサもんお心細いのを  
お言ひあやア居心ごさるまはヨ何卒はゆりハ千葉の  
貴嬢さんお茶さんうぢお止るまらん下さいますヨ  
「アそらやア房吉さん悪い了等ごヨお茶の氣  
あやア義理をさるつもの心あらうけはごもあつる  
人と強がる種ごうぢ心も三個が心と合せて然ら  
ふのまのやうお茶さんと大車あまのうぢよお別サ  
まハとうとお茶達ハさるる二個心強も連るうぢ







久ことお言ひのら<sup>まろ</sup>詮方<sup>まろ</sup>がら<sup>の</sup>うら<sup>の</sup>ま<sup>の</sup>ら<sup>の</sup>入<sup>の</sup>遣<sup>の</sup>せ<sup>の</sup>子<sup>の</sup>  
 佐へ<sup>ま</sup>願<sup>の</sup>お<sup>の</sup>し<sup>の</sup>と<sup>の</sup>せ<sup>の</sup>任<sup>の</sup>依<sup>の</sup>せ<sup>の</sup>先<sup>の</sup>刻<sup>の</sup>来<sup>の</sup>る<sup>の</sup>と<sup>の</sup>き<sup>の</sup>境<sup>の</sup>橋<sup>の</sup>頭<sup>の</sup>を<sup>の</sup>  
 余<sup>の</sup>程<sup>の</sup>六<sup>の</sup>ヶ<sup>の</sup>歩<sup>の</sup>行<sup>の</sup>つ<sup>の</sup>ろ<sup>の</sup>り<sup>の</sup>を<sup>の</sup>る<sup>の</sup>ま<sup>の</sup>ら<sup>の</sup>の<sup>の</sup>癖<sup>の</sup>の<sup>の</sup>  
 是<sup>の</sup>より<sup>の</sup>三<sup>の</sup>個<sup>の</sup>の<sup>の</sup>酒<sup>の</sup>食<sup>の</sup>も<sup>の</sup>果<sup>の</sup>く<sup>の</sup>常<sup>の</sup>ふ<sup>の</sup>う<sup>の</sup>ち<sup>の</sup>ま<sup>の</sup>の<sup>の</sup>輝<sup>の</sup>  
 川<sup>の</sup>へ<sup>の</sup>と<sup>の</sup>を<sup>の</sup>帰<sup>の</sup>り<sup>の</sup>け<sup>の</sup>る<sup>の</sup>

春色梅羨婦祢卷之十四了



上處女



春の<sup>の</sup>色<sup>の</sup>梅<sup>の</sup>羨<sup>の</sup>婦<sup>の</sup>祢<sup>の</sup>卷<sup>の</sup>之<sup>の</sup>十<sup>の</sup>四<sup>の</sup>了<sup>の</sup>  
 久<sup>の</sup>こと<sup>の</sup>お<sup>の</sup>言<sup>の</sup>ひ<sup>の</sup>の<sup>の</sup>ら<sup>の</sup>詮<sup>の</sup>方<sup>の</sup>が<sup>の</sup>ら<sup>の</sup>う<sup>の</sup>ら<sup>の</sup>ま<sup>の</sup>ら<sup>の</sup>入<sup>の</sup>遣<sup>の</sup>せ<sup>の</sup>子<sup>の</sup>  
 佐<sup>の</sup>へ<sup>の</sup>願<sup>の</sup>お<sup>の</sup>し<sup>の</sup>と<sup>の</sup>せ<sup>の</sup>任<sup>の</sup>依<sup>の</sup>せ<sup>の</sup>先<sup>の</sup>刻<sup>の</sup>来<sup>の</sup>る<sup>の</sup>と<sup>の</sup>き<sup>の</sup>境<sup>の</sup>橋<sup>の</sup>頭<sup>の</sup>を<sup>の</sup>  
 余<sup>の</sup>程<sup>の</sup>六<sup>の</sup>ヶ<sup>の</sup>歩<sup>の</sup>行<sup>の</sup>つ<sup>の</sup>ろ<sup>の</sup>り<sup>の</sup>を<sup>の</sup>る<sup>の</sup>ま<sup>の</sup>ら<sup>の</sup>の<sup>の</sup>癖<sup>の</sup>の<sup>の</sup>  
 是<sup>の</sup>より<sup>の</sup>三<sup>の</sup>個<sup>の</sup>の<sup>の</sup>酒<sup>の</sup>食<sup>の</sup>も<sup>の</sup>果<sup>の</sup>く<sup>の</sup>常<sup>の</sup>ふ<sup>の</sup>う<sup>の</sup>ち<sup>の</sup>ま<sup>の</sup>の<sup>の</sup>輝<sup>の</sup>  
 川<sup>の</sup>へ<sup>の</sup>と<sup>の</sup>を<sup>の</sup>帰<sup>の</sup>り<sup>の</sup>け<sup>の</sup>る<sup>の</sup>







